

仙台大豆作情報

令和3年度第1号
令和3年5月13日発行
仙台農業改良普及センター
TEL 022-275-8410

基本技術を確実に実施して、収量300kg/10a・品質1等級を目指しましょう！

今回の大豆栽培管理のポイント

- ① 排水対策 ② 土づくり ③ 施肥（基肥） ④ 適期播種 ⑤ 雑草防除（土壌処理）

1 排水対策

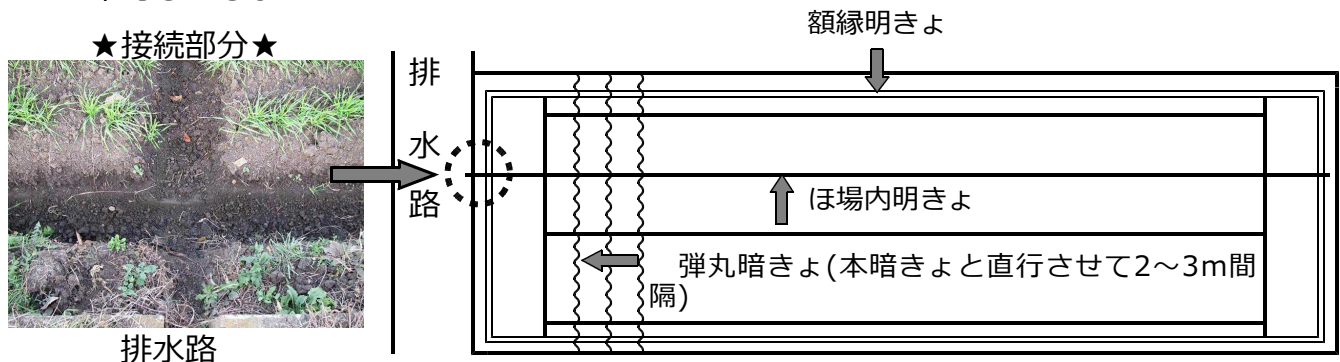
大豆は湿害に弱く、発芽期までに急激な吸水を受けたり酸欠状態となると出芽が阻害され、発芽しても生育不良株となります。また、湿害により根粒菌の着生が阻害される恐れもあるので、安定した収量を確保するために、排水対策は必ず実施しましょう。

（1）額縁及びほ場内明きよの設置

明きよの幅及び深さは20～30cm程度とし、畦畔に沿って明きよ（額縁明きよ）を設けましょう。ほ場内明きよは、水口から水尻まで傾斜がない場合は間隔を5m以内とします。

（2）明きよと排水路の接続

必ず排水路と接続し、停滞水の排水を促します。降雨後にはほ場を見回り、明きよの崩れを確認しましょう。



2 土づくり

（1）有機物の施用

堆肥などの有機物は土壌の物理性の改善、微生物の増殖などの働きのほか、根粒菌の着生・活動に良い効果を示します。牛ふん堆肥（窒素含有率1%程度）で10a当たり1t以内を目安に散布しましょう。

（2）酸度矯正

水田土壌はpH5.0～5.5の酸性であることが多いので、pH6.0～6.5を目安に苦土石灰等の石灰資材を用いて酸度矯正しましょう。

（3）耕うん（耕起・砕土）

砕土の良否は覆土の精度と種子への水分の供給に影響し、土塊が大きいと種子の過乾燥による出芽不良、播種深度のムラによる出芽の不揃い、除草剤の効果の低下につながります。

砕土の程度としては、直径2cm以下の小土塊の作土における比率が70%以上、地表面には3cm以上の土塊が混ざらないようにしましょう。

なお、耕起・整地から播種までの期間が長くなると土壌が乾燥し、出芽率や土壌処理剤の効果が低下しやすくなるので計画的に作業しましょう。

3 施肥（基肥）

根粒菌による窒素固定の利用は発芽後2週間ぐらいから始まります。その間は施肥による窒素の供給が必要です。根粒菌は土壌中の窒素濃度が高いと着生が阻害されるので、基肥窒素は大豆の初期生育を確保できる量としましょう。

標準基肥量（成分量/10a）

栽培様式	窒素	リン酸	加里	備考
普通播栽培 晩播栽培	1.5～2kg	5～6kg	6～8kg	水田転作初年目のほ場や、野菜作の後作で蔓化が懸念される場合は無窒素とし、リン酸、加里のみ施用。
晩播栽培(麦後)	2～3	6～9	8～12	麦稈をすき込む場合の成分量

4 適期播種

(1) 種子の消毒

種子伝染性病害である紫斑病や初期害虫の防除、鳥害忌避のため、必ず種子消毒を行います。特にタンレイは、県内で栽培されている品種の中では紫斑病に弱く、昨年は発生が目立ちました。クルーザーMAXXなどの薬剤で種子消毒を徹底しましょう。

(2) 播種

品種の特性に合わせて適期に播種します。作付面積が大きい組織においては、播種作業が梅雨時期に重なることもあります。種子消毒や播種機の点検など播種準備を計画的に行い、天気予報にも留意しつつ適期になったらすぐに播種できるようにしましょう。

播種期・播種量の目安

品種名	栽培様式	播種期	播種量 (kg/10a)	播種様式	
				畦間cm	株間cm
タンレイ	普通播	5/下～6/上	3.6～3.9	75～80	20
	晩播	6/中～7/5	5.2～8.3	70～75	10～15
ミヤギシロメ	普通播	5/下～6/上	3.8～5.1	75～80	20～25
タチナガハ	普通播		3.3～4.4	75～80	20～25
すずほのか	晩播	6/中～7/上	1.6～2.5	70～75	10～15

ミヤギシロメの蔓化・倒伏対策

ミヤギシロメは草姿が他の優良品種と異なり、分枝が横に広がるラケット型のため、蔓化・倒伏しやすい品種です。施肥量・栽植密度が多くなるに伴い蔓化・倒伏の程度が高まりますが、特に栽植密度に対する反応が大きくなります。対策としては、畦間・株間を基準どおりとし栽植密度をあげないことがポイントとなります。

(3) 播種深

出芽に適した播種深は3cm～5cmです。浅すぎると鳥害の恐れがあり、反対に深すぎると出芽、苗立ち率が低下することがあります。また、発芽に必要な水分を保持するために、覆土はしっかりと行いましょう。

(4) 畝立て播種

畝の高さは10～20 cm程度とします。畝間が通水路となり、地表面の排水を促します。

5 雑草防除（土壌処理）

雑草防除の良否は収量に大きく影響し、コンバイン収穫時に雑草が残っていると汚粒の原因となります。このため、土壌処理剤と中耕培土、茎葉処理剤を組み合わせることで除草することが大切です。播種後に散布する土壌処理剤については、以下のポイントを理解して散布しましょう。

土壌処理剤のポイント

- ・ 砕土不良では除草効果が劣るので、前述した砕土を丁寧に行います。
- ・ 発生後の雑草には効果が期待できないので播種直後に散布し、遅くとも播種後2～3日以内に使用します。
- ・ 耕起・整地から播種までの期間が長くなると土壌が乾燥するため、除草剤が土壌表面に拡散されず、効果が低下したりムラが出ます。作業は計画的に行いましょう。

アレチウリの防除対策

雑草防除雑草アレチウリのほ場侵入が拡大しています。防除効果が比較的高い土壌処理剤にフルミオWDGまたはダイロンゾルがあり、処理1ヶ月後のアレチウリ残草量を無処理対比で数%～40%程度に抑制できます。（ただし、砕土率が低い場合や過乾燥状態の場合には効果が低下します。）

※記載した農薬は令和3年5月12日現在のもので、使用する際は農薬ラベルで登録内容を確認してください。

東北地方の向こう1か月の天候の見通し（5/13仙台管区气象台発表）

予報のポイント

- 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
- 平均気温は、高い確率60%です。
- 日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

※「2週間天気予報」も活用して、計画的に作業を進めましょう。

■ 農薬の適正使用について

- ・ ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分に確認しましょう。
- ・ ラベルの注意事項にある「注意喚起マーク」の表示に従い、適切な保護具を着用しましょう。
- ・ 農薬使用の際に飛散防止対策を講じましょう。
- ・ 散布後には農薬の使用履歴を記帳しましょう。

■ 令和3年春の農作業安全確認運動実施中（令和3年4月1日から令和3年6月30日まで）

運動スローガン 「見直そう！農業機械作業の安全対策」

近年、様々な農業機械の普及、農業従事者の高齢化等により、機械操作のミス、過信と慣れによる安易な作業が重大事故に結びつき、依然として農作業死亡事故が発生しています。（全国で毎年約300件）農作業死亡事故を減少させるため、安全対策を強化して一層の事故防止に取り組みましょう。



次回「仙台大豆作情報第2号」の発行は、6月中旬を予定しています。